地域情報（県別）

【神奈川】「スポーツ整形外科からスポーツ総合診療まで」をテーマに、内科・婦人科領域にも対応-馬見塚尚孝・ベースボール＆スポーツクリニック野球医学センター長に聞く◆Vol.2

2019年10月28日 (月)配信 m3.com地域版

「開業医としてみんなの笑顔を目指しつつも、イノベーティブな診療を行いたい」ー。スポーツ選手への治療とサポートに注力する「ベースボール＆スポーツクリニック」センター長の馬見塚（まみづか）尚孝氏は、野球が大好きな教授と出会ったことで再びスポーツ整形外科に関わるようになり、さらにその後、ある婦人科医を介して、「スポーツ総合診療」の重要さを学んだという。現在はスポーツ内科と女性アスリート医学の観点から貧血や食欲不振、亜鉛欠乏症、月経困難症、低身長などにも対応し、包括的に選手をサポートしている。（2019年9月18日インタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら
▼第3回はこちら

――中島宏先生との出会いを機に幅広く診療するようになったとのことですが、それからどんな経緯でスポーツ選手の治療に携わるようになったのでしょう。

35歳のころに進んだ筑波大学大学院で2度目の転機が訪れました。スポーツ整形外科医からジェネラリスト整形外科医に方針を転換した私は、その中心的分野として脊椎疾患の研究を本格化させたいと考え、大学院で腱反射を定量化するシステムの開発に携わったのですが、当時の上司が浦和高校や東京大学で野球をしていた落合直之先生（筑波大学整形外科名誉教授）だったのです。

落合先生と働くうちに、野球選手の主治医として肘のじん帯再建手術を任せてもらえることになりました。しかしながら、当時の私は野球選手の治療経験は非常に少なく、分からないことだらけでした。野球障害に無知だったのですね。仮に手術がうまくいったとしても、その選手をどう現場復帰させていけばいいかも分かりませんでした。何となく野球選手としての自分の経験を通して言えることはあるわけですが、それが果たして本当にその選手にとって正しいかどうかは分かりません。

そこで、2006年に筑波大学硬式野球部の監督にお願いしてチームドクターとして活動を始めました。月曜から金曜日は病院で医師として働き、土日は野球部の練習や試合を見に行く生活を送ることで、臨床技術を上げながら野球現場の実際を吸収していったのです。それまでにも選手としての経験はあったわけですが、医師としての知識を持った上でスポーツ現場を見てみると、非常に多くの気づきがありました。スポーツフィールドでの活動は今も大変役に立っています。

センター長の馬見塚尚孝氏

――なるほど。そこで気になるのが、先生がなぜ開業したかです。

スポーツ選手の治療とサポートに新たな可能性を感じ、開業医としてイノベーティブな診療を行いたかったからです。そう考えるようになった背景には、２人の先生の存在があります。

一人目は、先ほども話した落合先生です。落合先生とは「つくば野球研究会」という団体の運営をご一緒させていただきました。この研究会は、「肘の障害に悩む子どもたちの現状を知ってほしい」と落合先生が立ち上げたもので、当初は主に、筑波大学整形外科の医療関係者が現場の指導者や保護者に野球障害の実態を説明していました。それが徐々にスポーツ科学の研究者からコーチング学やバイオメカニクス、その他さまざまな分野の最新情報を学ぶ場として発展していき、後に400人ほどの聴衆が集まるまでになりました。

この会を運営する間に、野球障害が専門の整形外科医を始め、さまざまな専門家と出会うことができました。現在連載を持っている「ベースボールクリニック」の編集長さんや、アドバイザーとして野球用グラブやトレーニングシューズなどの用具開発に協力しているゼット株式会社の方と出会ったのもこの会でした。つくば野球研究会での学びを通じて、「いわゆる総合病院でできることには限界がある」と感じるようになったのです。

二人目は、西別府病院スポーツ医学センター（大分県）の松田貴雄先生です。私は大分県の出身で、親族の体調悪化により一時的に地元に戻ったわけですが、そこで女性アスリートのサポートを専門にする松田先生からさまざまなことを教わりました。松田先生は月経困難症などの婦人科領域に留まらず、貧血や食欲不振、亜鉛欠乏症、骨粗しょう症などを含めて幅広く女性アスリートの問題に対応していました。先生にいろんな話をお聞きする中で、「亜鉛欠乏症で食欲不振になっているのは女性だけじゃなく男性にもいるだろうから、先生も（検査を）やってみたら？」と勧められて実際に行ってみると、予想以上に亜鉛欠乏症の方が多くいました。体内の亜鉛が不足することで食欲が落ちてしまい、身長の伸びの鈍化にも影響していることがわかったのです。

これには衝撃を受けました。私はそれまで「整形外科」「スポーツフィールド」「サイエンス」の3本柱でやってきましたが、それらだけではスポーツ選手に最適な指針を示していないと気づきました。内科領域や女性アスリート領域なども嫌がらずに学び、診療に生かさなければいけないのだと。

それからは整形外科医として月経困難症や低身長の相談にも対応するようになったわけですが、既存の総合病院ではこういった独自性のある診療を組織的に推進することは難しいと感じました。そこで、自分でやりたい診療ができる医療機関を作ろうと考えたわけです。

同院にある広々としたリハビリ室（クリニック提供）

――改めてクリニックのコンセプトをお聞かせください。

当院は「ベースボール＆スポーツクリニック」という名前の通り、野球とスポーツに関わる診療を行う施設です。元々は整形外科医ですからスポーツ整形外科が診療の中心ですが、これに加えてスポーツフィールドでの経験やコーチング学なども生かしています。外来で選手から話を聞くことでグラウンドで何が起きているのかが想像でき、競技現場の専門用語も活用しながら説明できるのです。

また、整形外科領域の課題で受診した選手たちの多くはスポーツ内科や女性アスリート医学が関わる課題を持ち合わせていることが多いので、それらの治療も合わせて「スポーツ総合診療医」として役立つことを目指しています。

内科の領域は年を追うごとに専門分化されていきましたが、それだけでは不十分で「内科領域を幅広く診られる科もなくてはいけない」という判断のもと、総合診療科が生まれました。私はスポーツ整形外科医ですが、スポーツの分野でも他の領域を合わせながら診療する医師が必要なのだと考えています。筋肉や腱、骨だけを診るのではなく、婦人科的な問題や内科的な問題、さらには成長といった観点を踏まえて選手の予防、治療、育成に携わっていきたいのです。そのため、他科のスポーツドクターとも連携するように心がけています。

開業に当たっては全国から患者さんが来やすいような場所を探しました。武蔵小杉は多くの鉄道路線が乗り入れていて、新幹線の新横浜駅や羽田空港からもアクセスが良く、さらに野球を始めとするスポーツ熱の高い場所です。ま

だ開業して4ヵ月ですが、神奈川や東京を始めとする関東一円、静岡、長野、石川、九州といったように各地から患者さんが少しずつお越しいただけるようになってきました。

――クリニックのコンセプトを実現するためには、先生以外のスタッフも重要になりそうです。

はい。各方面に秀でたスタッフに集まってもらいました。常勤が9人、非常勤が3人の計12人の体制で、医師は私の他に整形外科医と非常勤の女性アスリートの先生が在籍しています。医師以外の専門家が充実していることが大きな特徴で、日本スポーツ振興センターでジュニアアスリートを育てていた育成コーチの豊田太郎さん、腰痛治療のスペシャリストである理学療法士の折笠佑太さん、柔道整復師・鍼灸師の資格も持つアスレチックトレーナーの関口徹さん、セーリング日本代表を担当する管理栄養士の渡辺千夏さん、野球選手の子どもを持つ看護師の松本佳代さん、東海大学硬式野球部の元マネジャーであり星野リゾートで接遇を学んできた秘書の薮田敦子さん、元野球選手の武井健也さんといったように、スポーツ現場での経験が豊富な方が共に働いてくれています。

◆馬見塚 尚孝（まみづか・なおたか）氏

琉球大学医学部卒、筑波大学大学院修了。医学博士。専門は野球医学。筑波大学の関連病院で整形外科医として臨床経験を積みながら、筑波大学硬式野球部のチームドクターとして野球現場の実際を吸収、診療に生かしてきた。その後、スポーツ選手の治療やサポートには内科領域を踏まえた対応が必要だと実感し、2019年5月に神奈川県川崎市中原区に「ベースボール＆スポーツクリニック」を開院。現在、「スポーツ総合診療科」をテーマに掲げて食欲不振や貧血、月経困難症、低身長などの悩みにも応えながら選手の治療と予防、育成に携わる。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索